

「中小企業経営に効く資格」～その効用から短期合格法まで～

「国内年間受験者数 245 万人」TOEIC® (第 5 回)



松本光正社労士・行政書士・診断士事務所

I はじめに

コロナ禍で迎えた 2021 年。

本来であれば、昨年は東京オリンピックが開催され、私たちは世界中から多くのアスリートや観光客を迎えていたはずでした。駅や観光地で目にする外国語の看板、電車内に流れる英語、中国語、韓国語のアナウンスに一抹の寂しさを感じてしまいます。

「コロナが収まったら、日本へ行ってみたい」と言ってくれる外国人は今もたくさんいます。コロナ前と全く同じという訳にはいかないにしても、新しい形のにぎわいができるだけ早く戻って来てくれることを願うばかりです。

こうした中でも、アメリカ大統領選挙の結果や、RCEP（地域的な包括的経済連携）への署名といったニュースからは、これまでの自国中心主義から多国間主義、自由貿易への回帰を感じとることができます。コロナの収束とともにグローバル化の流れは再び加速することになりそうです。

ビジネスパーソンに人気で、1 年以内の学習期間で合格が可能な資格をご紹介してきた本連載。今回と次回は外国語編です。5 回目となる今回は、ビジネス英語試験の代表格であり、圧倒的な人気を誇る TOEIC®（トイーック、Test of English for International Communication）を取り上げます。

実は TOEIC® には 4 種類あります。通常レベルの TOEIC® と初級レベルの TOEIC Bridge® に大きく分かれていて、それぞれに Reading & Listening（「読む」と「聞く」）と Speaking & Writing（「話す」と「書く」）のテストがあります。企業や大学での評価基準として広く採用されているのは、通

常レベルの R & L テストで、国内年間受験者数は 245 万人（2018 年）に上ります。S & W テストが 3.9 万人、TOEIC Bridge® は 16.5 万人とまだそれほど普及しているとは言えませんので、今回は R & L テストを前提にお話しします。

II そもそも外国語学習は必要か？

TOEIC® の具体的な話に入る前に、今の時代にそもそも外国語学習が必要なのか、ということについて考えてみたいと思います。

2020 年度から、小学 3、4 年生に外国語に触れるための授業が加わり、小学 5、6 年生になると教科として外国語を学ぶことになりました。高校入試や大学入試においても外国語の成績が合否に大きく関わってくることから、今も昔も、電車内で受験生が必死に単語帳を繰っている姿を目にします。

一方で、翻訳アプリや自動翻訳機の性能が日に日に上がっています。すでに様々な場面で活用され始めていますので、皆さんもお使いになられたことがあるかもしれません。一度その便利さを知ってしまうと「果たして日本人全員が外国語を学ぶ必要があるのだろうか」という疑問が湧いてくるのも頷けます。

我々は学校で何年にもわたって外国語を学んできたにも関わらず、話せないことが当たり前のようになっています。それは、学校での教育方法の問題というよりも、社会に出てから使う必要がなかったから、ということが大きいでしょう。日本の大学教育はレベルが高く、国内のマーケットも大きいため、勉強や仕事が日本語だけで完結できてしまいます。外国語ができなくて困ることがほ

とんどありません。多くの人が「海外旅行に行った時に外国語が少し話せたら楽しいだろうな」というレベルで満足しています。その程度であれば、今やスマホの翻訳アプリで用が足りてしまいます。

以上から、外国語が必要な環境に身を置くことになる人を除けば、大人になって外国語学習に励む必要性は低いと言えるでしょう。

ただ、子どもたちが将来どういう道に進むのかは、大人になった時に本人が選択するものです。その際、選択肢を狭めて、可能性を奪ってしまうようなことがあってはなりません。すべての子供たちに外国語ができることの楽しさを伝えることはとても重要です。

言葉でのコミュニケーションは、人と人との信頼を醸成してくれます。そのためには面と向かって直接言葉を交わすことが大切です。間に翻訳アプリなどの機械を介すのと介さないのでは、信頼の深まりの度合いが全く違ってきます。機械を介したままで、別の言語を話す人と本当の恋に落ちるなどということがあるでしょうか。

ビジネス上の取引で最も重要なのはお互いの信頼感です。外国語でビジネスをする必要がある人にとって外国語学習は必須です。

将来、さらに技術が発達し、間に機械が介在しているのかどうかさえ分からないような時代になれば、人は外国語学習から解放されるのかもしれませんが。

必ずしも皆が外国語に取り組む必要はありませんが、機械に頼らず、自ら外国語でコミュニケーションを取ろうとすれば、距離は一気に縮まり、信頼につながります。

III 外国語習得のための2ステップ

大人になってから外国語を習得するためにはどうすれば良いのでしょうか。

前提として、その外国語が話されている国や話している人に対して興味があることが必要です。外国語学習の中に楽しさがないのなら、いずれ挫折することになります。

その上で、以下の2ステップを実行します。外国語ができるようになるためにやることはこれだけです。

【外国語習得のための2ステップ】

ステップ1：短期集中で発音・基本文法・基本単語を覚える

ステップ2：とにかく聞く・話す・読む

今回はステップ1についてのみ解説します。このステップ1の学習に、TOEIC®を組み合わせれば、学習の動機付けにもなりますし、締め切り効果から効率も上がります。ステップ2は次回お話しいたします。

(1) 短期集中

まず、必要最低限の知識を頭に入れてしまわなければなりません。そのためには短期集中で、繰り返すことが必要です。時間をかけても忘れてしまうだけです。できれば半年以内にステップ1を終わらせて次に進みたいものです。

(2) 発音

私は、外国語学習で最も重要なのは発音だと考えています。何より最初にマスターすべきは発音です。ここをいい加減にしたままで学習を進めると、せっかく膨大な時間と労力を費やしたにも関

ならず、習得できたのは外国人に通じない外国語だった、ということになりかねません。

中国語やベトナム語といった音声やイントネーションが少しでも変わると、全く違う意味になってしまう言語は、いい加減な発音ではほとんど通じません。

では、英語はどうでしょう。

「英語は日本式の発音でも良いのでは？ インドやフィリピンの人も皆、現地式の発音で英語を話していることだし」という意見もあります。

それでも私が最初に正しい発音を徹底的に鍛えるべきだと考えるのは「発音できない音は、聞きとれない」からです。

例えば、サッカーやボクシングがお好きな方はスペイン語やポルトガル語を耳にすることがあると思います。本国だけでなく中南米全土で話されているからです。意味は分からなくても音は聞き取れるし、短い言葉なら真似して発音できるはず。韓国の映画やドラマがお好きな方にも同様のご経験がおありでしょう。それは、これらの言葉の音が日本語の音とかなりの割合で共通しているからです。

一方、ロシア語やフランス語はどうでしょうか。何を言っているのかさっぱり分からず、真似して発音しようにもできません。

正しい発音ができれば、正しい音が聞こえるようになります。正しい音を何度も聞いて「音で」言葉を覚えるとより早く、より定着しやすくなります。いずれは、文字に目を通していただけで正しい音が聞こえてくるようになります。

会話文などを読んで練習する際には、正しい発音

で、外国人になりきって行えば上達も早くなります。何事もまず模倣から始めるのが近道です。

【教材】 発音練習専用の CD 付参考書（あごの位置、唇の形、舌の位置、息の出し方等を詳しく解説しているもの）

（3）基本文法

発音がほぼマスターできたら、文法を基礎から一気に学びます。

英語であれば、中学1～3年生の教科書で扱われている文法事項を理解した上で、書き込み式のテキストなどを使って、どんどん書いて身につけます。1冊を書き終えてテキストを真っ黒にしたら、同じテキストをもう1冊買ってきて覚えるまで繰り返します。

当然のことですが、文法から言葉が生まれた訳ではなく、言葉の中にある規則らしきものを説明するために文法ができました。そのため文法で言葉すべてを説明できるものではありません。いつまでも文法にばかりこだわってはいは外国語の上達はありせん。

ただ、学び始めのこの時期はせっかくルール化してもらった基本文法を利用させてもらうのが便利で近道です。

中上級になると、文法を意識することなく、いろいろな場面で実際に使われている言葉や語順をそのまま受け入れることで語感を磨いていくことになります。その時になって気が付くのは、話し言葉で使われている文法というのは決して無限にあるのではなく、むしろとても少ないということです。

【教材】 中学校の教科書レベルの基礎的な文法参考書、書き込み式文法テキスト

(4) 基本単語

基本文法の学習と並行して、基本的な単語を覚えていきます。

「また学生時代のように無味乾燥な単語集と格闘しなければならないのか…」

確かにそうなのですが、英語であれば、基本的な単語は仕事や日常生活で接していることが多く、意外と知っているものです。また、今の単語集はイラストが多用されていたり、文章の中で覚えられるようになっていたりと様々な工夫がなされています。書店でお気に入りの一冊を見つけたら、必ずしも100%覚える必要はありませんので、とにかく5周、10周と繰り返しましょう。

単語の暗記というと終わりがないように思えますが、別に難しい単語を知らなくても、同じ概念を自分が持っている易しい単語を使って言い換えられればそれで良いのです。

中上級になれば、その単語がどんな文、文脈、場面でよく使われているのか、ということの切り口に語彙を増やしていくことになります。

【教材】お気に入りの基本単語集

外国語学習は発音のマスターから。そして基本文法と基本単語を「短期集中」+「繰り返し」で覚えてしまいましょう。

IV TOEIC® ってどんな試験？

- 受験資格：特になし
- 実施日程：誰でも受験できる公開テストは年間10回。他に企業や学校が随時実施するIPテストがある。
- 試験方式：すべてマークシート方式
出題形式：リスニング（約45分・100問）
問題構成：①写真描写問題、②応答問題、③会

話問題、④説明文問題

↓ ↓ ↓（休憩なし）

出題形式：リーディング（約75分・100問）

問題構成：⑤短文穴埋め問題、⑥長文穴埋め問題、⑦文書読解問題

- 試験結果：英検のような合格・不合格ではなく、リスニング5～495点、リーディング5～495点、計10～990点のスコアで、5点刻みで表示される。

- 受験料：6,490円（税込）

※平均スコアは600点前後

※レベルの目安

レベルA	860～990点
レベルB	730～855点
レベルC	470～725点
レベルD	220～465点
レベルE	10～215点

※企業・団体が社員・職員に期待する平均スコア

新入社員	535点
中途社員	560点
技術部門	560点
営業部門	575点
海外部門	690点

出典：（一財）国際ビジネスコミュニケーション協会
「英語活用実態調査2019」

TOEIC® はさまざまなレベルの受験生が同じ問題に取り組む一斉客観テストです。そのため、各パートは、易しい問題から始まりだんだんと難しくなっていきます。問題のレベルはおおよそ英検2級から準1級レベルです。

この試験はまさに時間との勝負です。まずリスニング問題100問を45分で解かなければなりま

せん。問題は1度しか読まれませんので、聞いてすぐに正解を選ぶという集中力と瞬発力が試されます。まだ自らのレベルが高くない時は、問題が難しくなってくると、ついていけなくなり適当にマークすることが続きます。そうした状況で集中力を保つのはたいへんです。

リスニングが終わるともうくたくたですが、まだリーディング問題100問が待っています。間に休憩はありません。最初の文法問題はまだ良いのですが、後半の文書読解問題はかなりのボリュームで、75分で全ての問題に目を通すのは至難の業です。スピードだけでなくスタミナも必要です。試験終了直前になると、ほとんどの受験生が、時間がなくて解けなかった問題の解答欄を適当にマークする、いわゆる「塗り絵」をすることになります。時間内に全ての問題に解答できるようになったら、たいいていレベルAの860点に到達しています。

TOEIC®は時間との勝負。じっくり考えて答えを出す試験ではありません。集中力と瞬発力、それらを保つためのスタミナも必要です。

V 短期間で目標スコアを取る方法

これまでの連載において述べてきたのは、多忙でなかなか時間が取れないビジネスパーソンにとって「時は金なり」だということでした。そのために必要な知識は、ノウハウのある予備校等の専門機関の講義動画を3周視聴するなどして「短期集中」でインプットしましょうというお話をしました。

これは外国語学習でも同じです。先ほどお話しした外国語学習のステップ1「短期集中で発音・基本文法・基本単語を覚える」がそれに当たります。このステップ1にTOEIC®を組み込むことで、学習効率を上げるのです。

また、TOEIC®のように瞬発力を問われる試験では、アウトプットも必要になります。何度も練習を繰り返し問題の解き方を身体にしみこませなければなりません。

では、TOEIC®で目標のスコアにできるだけ早く到達するにはどうすれば良いでしょう。英語力だけでなく、集中力と瞬発力、スタミナも求められるということでした。

私がお勧めするのは「毎回受験する」ということです。公開試験だけでも年間10回実施されます。本番の緊張感を数か月連続で経験することが、必要な能力養成の一番の近道です。もちろん試験と試験の間には、TOEIC®用の英単語集を使って語彙を増やし、TOEIC®テスト開発機関であるEducational Testing Service (ETS) から発売されている公式問題集を使って問題演習をします。

TOEIC®には問題を解くテクニックが多数あります。例えばリスニングにおいて、聞いて分からなくても、とにかく瞬間的に答えをマークして、次の放送が始まるまでの時間に、次の問題の問いと選択肢に目を通し準備しておく、というようなものです。こうしたテクニックを解説した参考書も多数ありますので、一読しておくのも良いでしょう。

注意しなければならないのは、TOEIC®で高いスコアを取ることが目的になってしまうことです。満点の990点を取ったからといってそれほど意味はありません。目的はあくまで「英語ができる」ようになることであって、TOEIC®の学習はそのための一つの手段に過ぎません。目標のスコアに達したら、TOEIC®は早々に卒業して、外国語学習のステップ2へ進みましょう。

TOEIC® はあくまで外国語学習のステップ1。連続して受験することで目標スコアをクリアして、ステップ2へ移りましょう。

VI 中小企業経営への「効用」

それでは最後に、TOEIC® で高いスコアを取ることによって中小企業経営にどのような効用があるのかを考えてみます。

TOEIC® はリスニングとリーディングの問題に、マークシートで答える試験でした。「聞く」力と「読む」力がどれだけあるかを見る試験です。

「TOEIC® で900点を取りましたが、英語はほとんど話せません」というのはよくあることです。なぜなら「話す」力と「書く」力を測る試験ではないからです。

繰り返しになりますが、TOEIC® は外国語学習のステップ1に過ぎません。話すためには話すためのトレーニングが必要なのです。

では、TOEIC® を受験することはビジネスにおいて何の意味もないのかというと、もちろんそういう訳ではありません。

まず、現代において、海外の取引先や現地工場などを行う日常のコミュニケーションは、電子メールなどの文面上でのやり取りが中心です。TOEIC® が扱うビジネス英語に慣れてくると、英文のメールを読むことはもちろん、定型的な文であれば書くこともできるようになります。

次に、業務に必要な資料や情報の収集です。英語で検索できるようになるとその情報量は一気に広がります。ネット上の情報であれば、翻訳アプリを使って日本語にして読んでしまっても構いません。TOEIC® 上級者であれば、自動翻訳の正

しくないところを修正する能力が備わっています。

最後に、これが最も大きい効用かもしれません。こつこつ努力できる人なら、受験するたびにスコアが上がっていきます。それによって英語学習が楽しくなってくると、英語やその背景にある文化へ興味を持つようになります。関連する本を読んだり、映画を観たりするようになります。

外国語を学ぶということは、その国の文化や習慣を学ぶことです。それは自分の国の言葉や文化を客観的な目で見ることにつながります。

海外業務に対するモチベーションが高まり、「日本から見た海外」だけでなく「海外から見た日本」という二つの視点で業務をとらえることができるようになるのです。

TOEIC® は英文メールのやり取り、英語での情報収集だけでなく、グローバルな視点を持った人材の育成にも力を発揮します。

さて、今回は外国語を「聞く」ことと、「読む」ことに焦点を当ててお話ししてきましたが如何だったでしょうか。次回は主に「話す」ことについてご説明いたします。

外国語習得のためのステップは1から2へと進みます。ステップ2で具体的に何をすべきかをお伝えします。

さらには「外国語ができる」とはどういうことか、についても考えていきたいと思います。

《プロフィール》

松本 光正 1972年、奈良県磯城郡生まれ。神戸大学経営学部卒業。外国人技能実習生受入れ業務等を経て、2016年、独立開業。専門は外国人雇用。全国各地で講演、セミナーを実施している。社会保険労務士、申請取次行政書士、中小企業診断士、全国通訳案内士(中国語・英語)。近著に「待ったなし！外国人雇用」～STORYで読む入管法改正～(三恵社、2019年)がある。メールアドレス：songben0103@gmail.com